『資本論』における実践，批判，論理の諸相

中　尾　訓　生

最も単純なカテゴリーである「商品」から説きおこし，資本—利子，土地—地代，労働—賃金，という現実の日常的表象に到達する上向の叙述体系であるところの『資本論』はマルクス自身の語っているところに依ると，それはブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判的叙述であり，また近代社会の経済的運動法則の叙述でもあるという。

通常，経済学の出発点となる表象，いわゆる三位一体の世界（資本—利子，土地—地代，労働—賃金）が『資本論』では叙述の最終にきている。

これが，マルクスに依れば三位一体の世界から生じる資本主義永遠性の解釈にたいする批判であると同時に，また資本主義経済機構の解明にもなっているという。

ブルジョア経済学の諸カテゴリーを批判するということは，考察対象は「カテゴリー」であるということであり，経済の運動法則を解明するということは，その考察対象は生産，分配，消費の社会的物質代謝（素材変態）である。そうすると，『資本論』は次元を異にする二つの考察対象から組み立てられていることになる。『資本論』の解釈が厳密さを要求しているのは，この点にその主因はあるように思う。

『資本論』において，二つの対象はどのように関連し，それが資本主義社会の経済をどのように解明することになるのだろうか。

人は『資本論』を通常の観念に従って「経済学」の項に分類するが，これは『資本論』がブルジョア経済学の諸カテゴリーを批判している側面を無視することである。

なぜなら「経済学」の項に分類しているということは，所与とされている諸カテゴリーを受容して，それで『資本論』を解釈しているということであるから。

シュムペーターはマルクスが最も苦闘して仕上げたところの『資本論』の一巻部分を経済学に非ずとして切り捨ててしまう[1]。然る後に，経済学に相当する部分を抜き出し，（例えば，再生産表式論や価格論の部分）簡明に再構成するのであるが，この方法は大略マルクス経済学者も暗黙に従っている『資本論』の一般的処理方法である。

本稿はマルクス解釈者が切り捨てた部分を復元しながら，マルクスの「資本主義社会経済」の把握方法がいかなるものであるかを概略する。

(一)

(1)

「もしも私が（経済学を）人口から始めるとすればそれは全体についての一つの混沌とした表象であろう。そしてもっと詳しく規定することによって私は分析的にだんだんもっと簡単な概念に考えついてゆくだろう。表象された具体的なものからだんだん稀薄になる抽象的なものに進んでいってついには最も簡単な諸規定に到達するであろう（下向過程）。そこでこんどはそこから再びあともどりの旅を始めて最後には人口に到達するであろう（上向過程）。といってもこんどは一つの全体についての混沌とした表象としての人口にではなくて多くの規定と関係をふくむ一つの豊かな総体としての人口に到達するであろう。（括弧は引用者）」[2]

マルクスの周知の経済学の方法である下向，上向についての説明である。『資本論』は上向の叙述体系である。しかし，これだけでは『資本論』においてなぜ「商品」が上向の起点に位置しているのか，理解できないし，「商

1）『経済分析の歴史』1分冊　73頁シュムペーター，東畑精一訳
2）「経済学批判への序説」（『経済学批判』所収，294頁，K・マルクス，国民文庫）

品」から「貨幣」,「資本」に至る上向の方法もわからない。

もう少しマルクスの説明をみてみよう。

「経済学的諸カテゴリーの歩みの場合に次のことが銘記されなければならない。……主体が，ここでは近代ブルジョア社会があたえられているということ」だから「経済学的諸カテゴリーをそれらが歴史的に規定的カテゴリーだった順序にしたがって配列することは実行できないし，まちがいでもあろう。」

マルクスは上向への展開は歴史的順序に従うのではないという。すなわち，歴史的順序に従うならば，地代，土地所有から始めて資本の説明に入ることになるだろうが，近代ブルジョア経済社会では資本が中心的位置にあり，資本の説明から地代の説明へ移るべきと主張する。資本は地代を抜きにしても理解できるが，地代は資本を抜きにしては理解できないということである。

このことは「諸カテゴリーの順序はそれらが近代ブルジョア社会で互にもっている関係によって規定されている」からだと説明している。マルクスは「諸カテゴリーの順序」つまり，叙述の方法を重視する。「商品」が叙述の始点であること，そして上向への展開方法といった問題の理解は，まず主体を設定することに，すなわち「近代ブルジョア社会」の把握方法にかかっている。

下向，上向への方法を執筆した段階（1857年）の「経済学批判」体系の叙述プランは「①，一般的抽象的規定　②，資本，賃労働，土地所有，これらのものの相互関係　③，国家の形態でのブルジョア社会の総括，　……」[3]ということであった。

しかし，『資本論』冒頭の部分には，①の規定に相当するものは存在しない。プランが変更したのである。

「一般的抽象的規定」とはすべての社会形態にあてはまる規定という意味であるが，マルクスが冒頭にこの規定を予定したのは，近代ブルジョア社

3）同上　305頁

会」の歴史性を明確にするためであった。

例えば「資本は労働手段である。」あるいは，「労働手段は資本である。」と規定している人々は資本主義社会の永遠性を主張することになるとマルクスは解釈した。彼らは「一般的抽象的規定」（労働手段）と当の社会の「歴史的規定」（資本）を混在している。混在に陥らないために「一般的抽象的規定」をまず摘出しておくことが必要なのだとマルクスはいう。「一般的抽象的規定」によって「近代ブルジョア社会」が把握されるといっているのではないことに注意しなければならない。

他の社会形態とは区別された「近代ブルジョア社会」を把握する方法がわかると，したがってこの規定は必要ではなくなる。

「一般的抽象的規定」はあらゆる社会形態に共通する規定であるが，マルクスは次のことも認識した。それは，この規定が獲得されたということそれ自体は「歴史的事実」である。つまり，この規定の獲得は「この簡単な抽象を生みだす諸関係」を歴史的背景としているということである。

この点にたいする考察が「近代ブルジョア社会」の把握へと結実し，「一般的抽象的規定」を取り除くことになった。

ブルジョア経済社会をその総体において把握する，あるいは認識するには或る困難が存在する。簡単にいうと，それは認識主体が対象に含まれていることから生ずる。つまり「一般的抽象的規定」を認識した主体はこの規定を生みだしている「諸関係」の構成要素であるということである。すなわち

対象を客観化するためには認識主体が客観化されねばならない。

マルクスの困難克服は上述しているように対象把握のための，換言すると対象を表現するための「カテゴリー」それ自体を考察することからはじまっている。「カテゴリー」が表象する「モノ」を考察するまえに，「カテゴリー」それ自体の意味を，その発生を探求する。これが認識主体の客観化につながる。

マルクスの困難克服は『経済学批判』（1859年）における「富」すなわち「商品」に関する先行者の諸論述の検討においてまず読み取ることができる。

「検討」をみるまえに，この社会科学に共通する困難性について述べておくことにする。

（2）

社会科学においては，人間は研究主体であるとともに，また研究対象であるという特別の位置にあり，研究はこの二つに同時に注目しなければならない。

社会の一員である研究主体の対象が当の社会であるとき，彼の視角および，社会を説明するため彼が選択し，使用している用語はその社会によって規定されている。

他方では「社会」が把握された場合，その実在性は個々人の意識のレヴェルで，つまり彼らが採用している諸用語のうちに確証されねばならない。個々人の意識レヴェルのことと社会的なるものとは明らかに異なっているが，しかし社会性は諸個人の意識で確証されなければならない。

このことは全体的，社会的なるものと個人的なるものとの関連である。この関連はデュルケムの社会把握を考察するときは想起されねばならない。

A・スミスやD・リカードの経済学は個々の孤立した猟師や漁夫から出発しているが，これはこの困難性を回避するものであった。

猟師や漁夫の行動は即ち社会的行動であった。この場合，諸個人の合算として社会的なるものが導出されており，合算によって新たな属性をもった実在が生じたとは考えない。

社会は個々の猟師や漁夫の性格によって規定される。したがって社会の欠陥や不整合は彼らの性格や無知に帰せられる。

スミスの孤立人とリカードの孤立人は性格を異にしているのであるが[4]，こ

4）A・スミスは『道徳感情論』で「同感」によって自分と社会，すなわち，まわりの人々の関係との結びつきとを考察した。彼がここでしていることは「社会」の把握である。彼の把握方法は心理学でいうところの内観法であって，結局のところは近代自然法思想家の土俵内での展開である。　リカードの想定した人間は，時間に還元された人間であり，資本主義社会の人間そのものである。マルクスは時間に還元された人間を原始的な漁夫と猟師と同視するリカードの時代錯誤を批判している。

こでは両孤立人とも「社会」の歴史性把握に失敗しているという共通の例示で引用されている。「経済学」は，より整理されてくると猟師や漁夫に代わってロビンソン・クルーソーを登場させる。

このような社会把握の方法は，主体（人間）と自然を対置し主体の本源的欲求から社会を構成する近代自然法思想家達の方法と同質のものであった。ロビンソン・クルーソーが近代市民社会の合理的経済人であったように，自然状態，自然人は野蛮状態，野蛮人ではなく，実は発展しつつあった商品交換，流通から抽象された状況，市民なのである。彼らはこの自然状態，自然人を社会を構成・演繹していく公準としている。

自然人の視角，彼らの使用する用語，彼らが表現し，説明するさいに（無意識的に）依拠している範式を普遍的なものとしているから，当然にも彼らには「認識の困難性」にたいする意識はない。しかし，ここで近代自然法思想家達の社会把握について，その特徴と歴史的性格は彼らを正しく評価するために指摘しておかねばならない。

すなわち，封建的有機的共同体の秩序原理は血縁的か，宗教的かであるが，いずれにしてもそれを支えている人々が依拠している範式は擬人的である。ここでの擬人的範式というのは人々の達することのできない願望，人々が不可能事と感得している自然現象等々を達成し，実現するところの人間を設定し，その人間に仮託した社会解釈の方法である。かかる社会解釈は「それ自身の生命を与えられて，相互の間でまた人間との間で相関係する独立の姿」に見えるようになって秩序原理を支えるのである。

かくして人々は自分自身を全体的秩序の一成分として納得する。

近代自然法思想家達の依拠している範式は擬人的に対抗して人間的であるといえる。それは商品交換によって規定されている。

商品交換が封建的有機的共同体を崩すかぎりにおいて商品交換の人間的翻訳，つまり規範的構成としての範式はマルクスがいうところの「物神性」には浸されてはいないが，資本主義社会の確立後はこの範式は「物神性」を助長する側面を優勢としてくる。社会発展，社会再生産において範式の果す役割の

重要性という問題がここに生じてくるのであるが本稿の課題ではないので最後で少しふれるが，詳述はしない。封建制度から資本主義制度への移行においてはこの範式は積極的役割を果たした。封建的有機的共同体の秩序原理との対抗関係にある自然人は自分達の identity を確認する社会を規範的に構成した。彼らの依拠した範式は資本主義社会の下では，その正当化のためにも，批判のためにも役立つ。それはこの範式が商品交換の人間的翻訳であるからである。

（3）

ピアジェは人間に第一にでてくる思考の傾向として次の二つをあげている。

「(1)，自分が世界の中心に位置していると考える傾向，

(2)，自分の行為や規則や習慣を他人にあてはめ一般的な普遍的なノルマにしたてあげるという傾向」[5]

(1)，(2)は論理的思考を形成する脱中心化の前段階の自己中心的思考といわれるものであるが，一般的に人が対象を精神的に同化するとき，特に対象がいまだ画定されていないときにみせる思考とみることもできる。

未形成の対象を精神的に同化しようとする大人は論理構造（数学者が群とよんでいる一般的構造）を有していない子どもと対象解釈は同じである[6]。civil philosophy がホッブスを始元とする[7]ことからもわかるように近代自然法思想家にとって「社会」という対象は画定しておらず，彼らは「社会」を主体（人間）を中心に据えて構成するのである。しかし主体の倫理，規範が対抗関係にある社会の不整合を衝くものであるなら構成された社会は歴史的先駆としての意義を有するであろう。

彼らが依拠した（もちろん無意識的であるが）枠組は商品交換を背景としており，したがって彼らの社会解釈は商品交換の規範的構成としてその姿を

5）The Place of the Sciences of Man in the System of Sciences; by Jean Piaget
『人間科学序説』(24頁　J・ピアジュ　波多野訳)

6）『Six Etudes de Psychologie』 par Jean Piaget
「子どもの精神発達」『思考の心理学』　所収　J・ピアジュ　滝沢武久訳

7）『イギリス社会哲学の成立と展開』　太田可夫

ととのえてくる。

擬人的範式も対象を人間の活動，行為に似せて構成するということでは，(1)，(2)のうえに構築されている。

ただ，見る，触れる，等々のように対象が具体的，感覚的に捕捉できるときは，対象の構成は対象の属性によって規制されるであろう。もし，「社会」が具体的，感覚的に捕捉可能ならば「社会」の規範的構成はその属性によって規制されるから自己中心的でなく脱中心化の色調を強くするだろう。

近代自然法思想家達の思考傾向を批判しながら彼らとは全く反対の「社会」把握を示したのが，デュルケムである[8]。

彼は次のようにいう。

「社会は諸個人のたんなる総和ではない。諸個人の結合によって形成された体系をなすわけであるが，この体系はそれ固有の諸属性をそなえた独特の一実在としてあらわれる。」（前掲書・207頁）このように諸個人に還元されることのない「社会」をデュルケムはどのように把握するのだろうか。

彼は「社会」あるいは「集団」はそれ自体が意識をもっているとし，それを集合意識とよんでいる。集合意識はもちろん，個人意識と相異しており，だから「社会生活の内容は純然たる心理的な要因，すなわち個人意識の諸状態によっては説明されえない」のである。集合意識は個人意識が結合し，化合することで，それもある一定の様式で化合することによって生じる。

「社会」の把握はしたがって化合の様式の深求ということになろう。社会的なるものと個人的なるものの関連が化合の様式の内容であると推察されるのであるが，しかし彼は個人意識は「集合的なるもの」から結果しているに

8）「かりに社会というものが一定の目的をめざして人々によって設定された諸手段の体系にほかならないとすれば，そうした目的は個人的なものでしかありえない。というのは，その社会の成立に先立っては，個人しか存在しえないからである。とすれば，社会の形成をうながし規定した諸々の観念や欲求は，個人から発することになるし，すべての淵源が個人にあるとすれば，必然的にすべてが個人によって説明されなければならないことになる。」（『Les Règles de La Méthode Sociologique』 par Émile Durkheim 『社会学的方法の基準』 200頁，デュルケム，宮島訳）

すぎないということを強調するにすぎない。「集合的なるもの」は諸個人の意識性のレヴェルで確証されねばならないのに。彼は「社会」(集合的なるもの) を求めて歴史を遡る。彼は「共時的なもの (社会構造) をそっくり歴史に従属させた。」[9]のである。「所有権」の把握で彼は当然のことながら，それを成立せしめているものを諸個人の性格に求めたりはしない。諸個人は逆にそれに拘束されている。

彼は「所有権」の起源をを歴史を遡って宗教観念に求める。[10]「所有権」という社会的なるものは，それの拘束を受けている人々とは時間・空間を異にしているところで把握されることになっている。

現に機能している「所有権」，すなわち人々の権利，義務の意識関連性は歴史を遡ってその起源を捕えたとしても解明はされないであろう。換言すると，権利，義務意識を支えている人々の価値観は歴史を遡って説明できるものではないであろう。[11]

「社会」把握に関しては大まかにみて三つのタイプが存在する。

「Ⅰ，加法的原子論的形成のタイプ。

これは社会を個人の集まったものにすぎないと考えるものである。個人は社会形成以前にすでに一定の性格をもっており，これを説明すれば社会も把握されるとする。

Ⅱ，創発的形成のタイプ。

社会は一つの全体で，それは個人の集合にはない新しい特性をもち，個人に対してそれを強制する。

Ⅲ，相関的全体性のタイプ。

社会は相互作用のシステムであり，これは個人をその出発点からすでに変

---

9)『General problems of Interdisciplinary Research and Common Mechanisms』by Jean Piaget　『現代科学論』(64頁，J・ピアジュ，芳賀・佐藤訳)

10)『Leçsons de Sociologie』　par Émile Durkheim　『社会学講義』(デュルケム　宮島・川喜多訳)

11)『Introduction à L' épistémologie Génetique』　par Jean Piaget　『発生的認識論序説』(269頁，275頁，J・ピアジュ　田辺・島雄訳)

化させていく。全体の変異もこの相互作用の結果として説明する。」[12)]

さて，Ⅰは近代自然法思想家の方法であり，Ⅱはデュルケムのそれである。Ⅲは本稿が検討しているマルクスの方法である。Ⅲはいかにして「困難」を克服しているのか，これからみていくことにする。

(二)

(1)

マルクスは「商品」に関する諸論述を検討してそれらが対象を使用価値的に同化する労働（合目的生産活動）と対象を価値的に同化する労働，つまり対象の属性を捨象し，量化してしまう労働（抽象労働）の二面から分類，整理できることを発見した。[13)]

これは諸論述が使用価値によって規定されている範式と価値によって規定されている範式のものとに分類できるということである。

すなわち，労働はその表現諸単位（用語）をもっており，その表現諸単位は労働を特徴づけているものに対応した範式によって意味を付与されているということである。

範式とは思考を規定する世界観，あるいは意味するもの (signifiant) と意味されるもの (signifié) を結びつけるコードのようなもの，つまり或る用語にいかなる経済的意味内容を付与するかを規定するものである。

マルクスは諸論述が二様に分類できるということは「イギリス経済学とフランスの経済学とのあいだの国民的な対照の発生的説明」[14)]さえも示し得るであろうと，これら両範式の「分析用具」としての内容の深さを暗示するよ

---

13)「商品を二重の形態の労働に分析すること，使用価値を現実的労働または合目的な生産的活動に，交換価値を労働時間または同等な社会的労働に分析することは，イギリスではウィリアム・ペティに，フランスではボアギュベールに始まり，イギリスではリカードに，フランスではシスモンディに終わる古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的最終成果である。」　同上②　58頁

14)　同上②　58頁

うなことを付言している。

一世紀半以上にわたる古典派経済学の商品に関する諸論述が示していることはペティからリカードへの発展が価値論の純化であり，したがってそれは経済学の抽象的カテゴリーの素材からの分離過程でもあるとマルクスは述べている。

リカードのブルジョア経済の徹底した量化による解剖は価値範式と使用価値範式の混在を常態としている人々をして「リカード氏はまるで他の遊星から落ちてきた人のようだった」といわしめた。[15)]

生産・分配・消費の経済過程は感覚的，イメージ的に表現すると素材変態(Stoffwechsel)である。価値範式による素材変態の表現は価値循環となる。具体的素材は無差別一様な価値に還元され，カテゴリーは素材から分離されている。換言すると，カテゴリーの指示物はまたカテゴリーである。

人々を驚かしたリカード理論もマルクスに依ると，カテゴリーの素材からの完全な分離はなされていない。彼の固定資本と流動資本にたいするマルクスの評注がそれを語っている。[16)]

しかし，リカード理論を再構成するとたしかにカテゴリーの素材からの完全な分離が可能である。ただ，この場合かって人々はリカードを他の遊星の人だと思うほどであったが，再構成された理論はそれほどの驚きを人々に与えないであろう。

なぜなら，価格表を貼附された「モノ」の世界が常態となり，象形文字（価格）が人々の常用文字であるとき，むしろ逆にカテゴリーの素材からの未分離こそが人々には理論の未熟さと映ずるだろう。

再構成されたリカード理論はリカードが直面した問題を解決しているし，リカード理論の核心である分配を精細化している。しかしリカード理論にマルクスが読み取り，高く評価したものは再構成された理論にはそれが完成されているが故に読み取ることはむつかしい。つまり完全に姿を消したのであ

15)　同上②　72頁
16)『資本論』Ⅱ251頁　K・マルクス(向坂訳，岩波)

る。カテゴリーの素材からの分離過程を完成した理論に併置することで，その理論の性格を判断しなければならない。

リカードは貨幣をその機能から規定しているし，利潤率＞0を最初から当然のこととして前提にしている。利潤はどこから生じているのか，というようなことには関心をよせていない。したがってリカードの理論形成の核心であった労働価値説は再構成された理論では姿を消すことになる。[17)]

いまや労働価値説に依らずしてリカード理論を解釈できるのである。しかし，対象を量化，およびその量的関連を問題にする「経済理論」の性格は抽象的労働に照応する価値範式に依らなければ理解できない。

（2）

ボアギュベールからシスモンディ，プルードンへの展開は使用価値範式による素材変態の解釈であった。この解釈には誰も成功しなかったが，それだけに価値化してゆく社会，価値化を行動原理とする社会にたいする批判は激しく鋭いものであった。

使用価値範式による経済過程の解釈が成功していないのは彼らの能力の欠如に依るのではない。

この点については後述するとして，まず価値化してゆく社会にたいする彼らの批判をみることにする。

対象を価値化するということは対象を同化する主体が価値的であるということである。

すなわち主体は抽象的労働の遂行者である。

使用価値範式に応ずる主体は合目的活動者である。彼はモノはその属性に従って自然に秩序づけられ，その属性に従って経済（物質代謝）は動いていると考える。

価値範式に応ずる主体と使用価値範式に応ずる主体は拮抗関係にあるとい

17）利潤率は賃金財の生産の技術的条件によって決定され，ここから諸価格は決定される。リカードが最初に想定していたことがトミトリエフによって再構成されている。『Economic Essays』 P. 59　V. K. Dmitriev, Cambridge Univ.

える。相互批判的なのである。

ボアギュベールは「ペティが黄金欲を一国民を刺激して産業の発展と世界市場の征服とに駆りたてる強力な衝動であると賛美したのにたいして」商品交換に介入し，その自然的均衡または調和を攪乱し，すべての自然的富を量化し，その属性を無視するところの貨幣にたいして熱狂的にたたかった。

ボアギュベールは「ただ富の素材的内容，使用価値，享受だけに注目して労働のブルジョア的形態，商品としての使用価値の生産と商品の交換過程を個人的労働がその目的を達する自然にかなった社会的形態だとみなしている。だから，貨幣の場合のようにブルジョア的富の特有な性格が彼のまえに現われると，彼は横奪的な異分子が侵入してきたのだと信じこみ」[18]憤慨するのである。このようにボアギュベールにおいては「モノ」の使用価値的内容，つまり属性と価値化していく「モノ」を対置している。現実の経済過程は価値循環であるのだから，「モノ」の属性を対置するだけでは価値範式による表現体系にたいして憤慨するだけで批判しきることはできない。批判が体系的であるためには使用価値範式による経済過程の表現体系を対置しなければならない。現実の経済過程は価値循環であるが，しかしそれは自然環境に内含されていることを考えるなら価値循環は自然環境の規制下にあることが推察できる。

自然環境は「モノ」の属性による結合体であるのだから，したがって価値循環の制約性を使用価値範式によっておそらく示すことができるだろう。

もちろん，ボアギュベールからシスモンディ，プルードンに至る使用価値範式に依拠している人達にはそれは困難なことであった。

価値循環にたいして自然環境は無限の容器と考えられていたし，事実そうであった。当時，価値循環拡大にたいする制約の主たるものはそのシステム内から生じる販路梗塞であった。

プルードンは恐慌の原因を「金」の属性にたいする人々の執着心に帰し，恐慌を回避するため時間紙券の発行による「金」の廃貨という実践的解答を

18)　同上②　63頁

提示した。労働者の実践を前提した実践的解答である。

使用価値範式からの社会解釈に共通していることは価値化した主体に対して創造的主体を対置していることである。

シスモンディは自己の理論をA・スミスの経済学を受容したものであり，それをほんのわずか，現実の経験を勘案して発展させたものと解している。「私達はA・スミスと共に，労働は富の唯一の源泉であり，節約は富の蓄積の唯一の方法であると主張する。だが私達は享受がこの蓄積の唯一の目標であり，国民の享受の増大が伴う時にのみ国富の増大が存在すると付言するのである。」[19]この付言は政府の経済への介入排除のスミスの主張にたいして政府の積極的介入を意図するものであった。

社会は物質的富を増大させているのに労働者は貧困化し，貧富差は拡大している。

倒産と失業という経済的悲惨を繁栄と背中あわせに有しているイギリス社会を観察して，さらに次のようにいう。「イギリスは物質の為に人間を忘却して手段の為に目的を犠牲に供したのではなかったか。」

シスモンディはイギリスが実践している原理に追随せんとしている諸国に警告するとともに新原理を主唱する。そしてその実践を政府に求める。価値化を続けているイギリス社会にたいして政府に使用価値実践を，つまり彼の提示する新原理の実施を求める。

価値実践による自然秩序のゆがみである階級分裂の是正を政府に求めるのである。

政府は規範的に構成され，価値実践に対抗する使用価値実践の主体と看做される。

「私達は政府を強者に対する弱者の保護者，自力に依って防禦し得ぬ者の守護者，個人の一時的な，だが熱狂的な利益に対する全体の永久的な，だが冷静な利益の代弁者たるべきものであると看做すのである。」[20]

---

19)『政治経済学新原理』(33頁　シスモンディ，山口・管間訳)
20) 同上⑲　34頁

シスモンディは価値循環の経済の病理（「富の痙攣」）をそのシステム内で解明したが，それに対置する使用価値循環の経済（自然環境に制約された経済）図を描くことができなかったがため，その治療を自立的小生産の経済へ後退させることに求めた。自立的小生産の世界では人々の実践は対象の価値化ではなく，使用価値実践であるとシスモンディは考えていた。価値範式が想定する主体は価値化しており，その行動は対象の価値化である。使用価値範式の想定する主体は対象の属性に従い，使用価値享受としての経済を構想する。

マルクスはいう。「リカードにおいて経済学が容赦することなく，その最後の結論を引き出し，それでもって終わりをつげたとすれば，シスモンディは経済学の自分自身にたいする疑惑を示すことによって，この終結を補完しているのである」と。[21)]

それならマルクス理論の終結はどうであろうか。労働者階級に価値実践に対抗する使用価値実践を歴史的必然として展望することで終結させている。

しかし，その実践の中味については「小ブル・空想主義者」プルードンや「小ブル的感傷的ロマン主義者」シスモンディのようには提示していない。

マルクスはリカード理論は科学的であると高く評価するが，これはカテゴリーの素材からの分離が他理論に比べてよくなされているからである。しかし，注意することはリカードがこのこと（素材からの分離）を意識しているのではないということである。換言すると，リカードは価値範式の歴史性，したがってカテゴリーの歴史性を認識してはいない。価値範式への依拠は無意識的である。フランスの文化，風土の影響を受けているシスモンディやプルードンが使用価値範式を無意識的に採用しているようにリカードのそれはイギリスの文化，風土の影響に依るのであろう。

価値範式に基づく説明が科学性の線上に位置し得るのはまず第一に対象が価値化されているからである。

リカードに比較され，プルードンはその非科学性を批判されるが，マルク

21）同上②　73頁

スのこの批判を全面的に容認すると，逆に私達はマルクス理論の革新性を見失うことになるだろう。

価値化した対象を使用価値範式で解釈しようというのであるからその不整合は当然であった。しかしマルクスはプルードンにたいして隠しているが，使用価値範式の重要性は十分に認識していた。

「社会」は商品所有者の相互作用，すなわち価値実践の相互作用として価値範式を生みだし，それを維持している。他方，使用価値範式は人間の思考，認識に，広くいうと実践に本源的に備わっているものである。

リカードを高く評価するマルクスがリカードと決定的に異なるのは価値範式を相対化していることである。価値範式の相対化を可能にさせているのは使用価値範式である。

両範式は相互に批判的である。

マルクスはリカードにたいしてはシスモンディやプルードンをシスモンディやプルードンにたいしてはリカードを対置し，お互いの範式への無意識的依拠を衝き合って批判させる。この場合，批判の性格は範式そのものへの認識の欠落が批判の基本であるから，両者の社会解釈の歴史性の欠如である。

マルクスは価値範式と使用価値範式のどちらが正しく，どちらが誤りであるか，というようなことをいっているのではない。マルクスは両範式の存在，すなわち人々は混在させているが無意識的にどちらか一方に比重を置いているという事実をそのままに受容し，その事実から両範式を「統一」して「社会」把握をめざすのである。

両範式を使うことによって，それぞれの説明体系の総体的位置を確かめることができる。使用価値範式を基本とするシスモンディは「経済学は幾多の点において感受性と構想力 (imagination) の領域に属する」として「A・スミスはあまりにも経済学を専ら計算に従属するものと考え」[22]ているという。

そして価値範式に立脚しているリカード理論は他の領域にあるとさえ評し

22) 同上⑲　35頁

ている。おそらく，リカードは逆の批判をシスモンディにたいしてするのではなかろうか。

このように相互に批判をし合う両範式を「統一」することは可能なのか。また「統一」して社会科学に内在している前述の「困難」を克服して，いかに「社会」把握をすることができるか。

マルクスは両範式を統一して新らしく範式を創ったのではない。「統一」とは次の意味である。両範式は一つの母体から生みだされていることに着目し，両範式と母体を関係させるということ。これから「社会」把握をめざす。

母体とは労働（＝実践）のことであり，労働は社会を形成し，社会の存立を支える主要素であるだろう。労働はそれを表現する諸単位をもっている。これら表現諸単位を選択，配置して，彼／彼女は労働の相互諸作用（社会）を解釈し，自らの実践の正当性を主張するのである。彼／彼女が「選択」し「配置」する仕方は範式に依拠している。したがって範式は個々人の（意識的）表現を全体的，社会的なるものに結びつける媒介項である。
繰り返すが，労働，ここでは社会を支えている労働であって範式と結合している。

社会を支えている労働がもっている，あるいは生みだしている表現単位に意味を付与するのは範式であるが，彼／彼女はこのことを意識してはいない。

彼／彼女は自分達が解釈している社会が，範式を生みだしていることを，規制していることを理解していない。

だから，彼／彼女の「解釈」は，社会の結果的事実を含意的に表現するだけである。[23)]

上述してきたことは『経済学批判』の「Ａ，商品の分析の史的考察」が与えている鳥瞰図である。

「困難」克服のための課題は彼／彼女の主張に埋め込まれている意識していない「社会」的なるものの摘出である。

マルクスがカテゴリーの発生を問題にするのはこのためである。

(三)

(1)

「資本主義的生産様式の支配的である社会の富は，巨大なる商品集積として現われ，個々の商品はこの富の成素形態として現われる。

したがって，われわれの研究は商品の分析をもって始まる。」[24)]

これは，『資本論』の冒頭の叙述である。

前述したように上向の出発点が何故，「商品」なのか，ということを解釈しなければならない。

「商品」とは彼／彼女の主張のなかでは「人間のなんらかの種類の欲望を充足させる「モノ」である。生産，分配，消費の経済過程で感覚的にとらえられている「モノ」である。

彼／彼女は経済過程をそれぞれの実践的立場から解釈する。彼／彼女の実践に共通していることは「富」を増大させることであった。「富」とは何か，「富」はいかにしたら増大するのか，これらのことが「解釈」の視角であった。

マルクスは彼/彼女の「富」(＝商品）に関する諸論述を検討して，これら諸論述が合目的生産活動，すなわち具体的有用労働かあるいはその生産物の

---

23)「貨幣」あるいは「資本」の彼／彼女の定義を検討すると，それは機能の側面から定義していることがわかる。しかし諸機能の関連については考察されていない。つまり「貨幣」は，価値尺度であり流通手段，蓄蔵，支払手段，そして世界貨幣という諸機能を統括したものであるが，彼/彼女は個々の機能から「貨幣」を規定するにすぎない。「資本」に関する定義も同様である。或る人にとっては貨幣が資本であり，また別の人は生産手段を資本であると規定する。また或る人には収入であるものが別の人には資本であることに彼らは混乱させられている。

「社会」を所与とすると，「社会」が持続している過程，つまり諸機能が観察されるだけである。換言すると，これは観察の用具であるカテゴリーもまた彼らには所与ということである。

すなわち，カテゴリーへの意味付与はカテゴリーが指示している「モノ」の機能からなされている。これらのことは『経済学批判』の「B，貨幣の度量単位にかんする諸理論」「C，流通手段と貨幣にかんする諸理論」；『資本論』の「資本の諸変態とその循環」において詳細に分析されている。

24)『資本論』Ⅰ　45頁

属性を捨象してしまう抽象的労働という実践（労働）の表現されたものであることを読み取った。

これら諸論述は彼/彼女の実践の二面性の反映であるということ，もちろん彼/彼女はこのことを意識していない。

マルクスは「検討」を通して商品と称されている「モノ」は実践の二面性を表現している，と解釈する。換言すると「商品」は実践の二面性から意味を付与されている。

彼/彼女の実践はまず商品所有者・交換者の相互作用つまり商品交換としてとらえられるが，それはこの相互作用が社会的なるものを内包しているからである。商品交換（W — G — W）は二つの事柄を内容としている。(A) 社会の素材変態（物質代謝）　(B)　当の社会の基本的関係（人と人との結びつき）である。

「諸商品の交換（流通）は社会的物質代謝，すなわち私的な諸個人の特殊な生産物の交換が，同時に諸個人がこの物質代謝のなかで結ぶ一定の社会的生産諸関係の創出でもある過程である。」[25)]

かくて彼/彼女の実践の把握はつまり「社会」の把握は「商品」の分析から始まる。

彼/彼女の主張においては「商品」も「貨幣」「資本」も具体的な「モノ」を指示しそれから意味を与えられているのであるが，マルクスにおいては，それらは実践の二面性から意味を付与される。

「1章，2節，商品に表わされた労働の二面性」の要点は彼，彼女の日常的表象の切開のための出発点なのである。

マルクス体系において「2節」の重要性はマルクス自身が語っている。「商品に含まれている労働の二面的な性質は，私がはじめて批判的に証明したのである。この点が跳躍点であって，これをめぐって経済学の理解があるのであるから，この点はここでもっと詳細に吟味しなければならない。」[26)]

25）同上②　58頁
26）『資本論』Ⅰ　54頁

「2節」は既述してきた「困難」を克服するための要石の位置にあるのだが，マルクスは，「商品に表わされた労働の二面性」を私が解釈するように〈労働の二面性によって意味を付与された「モノ」が商品である〉とはしていない。マルクスは「2節」で「労働の二面性」については説明している。

例えば，次のように。

「すべての労働は，一方において，生理学的意味における人間労働力の支出である。そしてこの同一な人間労働または抽象的に人間的な労働の属性において，労働は商品価値を形成する。すべての労働は他方において，特殊な目的の定まった形態における人間労働力の支出である。そしてこの具体的な有用労働の属性において，それは使用価値を生産する。」[27]　彼は「商品」は価値と使用価値を有し，したがって価値に結実する抽象的労働と使用価値に結実する具体的労働を「含んでいる」あるいは「体化している」という。彼は「表わしている」ということを「含んでいる」というように説明する。

マルクスの労働価値説の導入に対する批判はこの説明に依るところが大きい。

ヴェーム・バウェルクの周知の「蒸溜法」批判やマルクス派内部からは宇野弘蔵のそれがあげられる。[28]

私は「商品」に抽象的労働が体化されている（含まれている）として価値実体を導出する「1節」「2節」のマルクスの説明を受容するならば，ヴェーム・バウェルクの批判に首肯する。

マルクスは「序文」でも述べているように読者のために「通俗化」して労働価値論を導入したのであろうが，しかしこの通俗化は〈最も苦闘して仕上げた部分〉を読者に見失しなわせることになった。

「通俗化」によって労働価値説は物質代謝を解明するための分析用具（モデル）に歪曲されてしまうことになった。したがって，柴田敬のような理解

27）同上，　　60頁

28）『価値論』（青木書店）宇野弘蔵：，「カール・マルクスとその体系の経結」『論争・マルクス経済学』所収，スウィージー編　玉野井・石垣訳

が生じるのは当然でもある。[29]

しかし，マルクスの労働価値説（この表現は誤解を生みやすいが）は研究される対象に内在しているのであって理論家に奉仕する単なる分析用具ではない。強いていうならばマルクスの労働価値説の中味は，両範式であるだろう。

実践（商品所有者の相互作用）は社会的物質代謝の遂行であり，その社会の基本関係の絶えざる創出である。そしてまた実践は「対象」を認識（解釈）するため範式を創りだしている。

理論家（実践，認識主体）と分析用具（範式）と対象（実践＝相互作用）の三要素はマルクスにあっては一体のものなのである。この認識が困難を克服させる。

Ⅰのタイプと Ⅱのタイプが遭遇した問題はⅠでは，個別の合算を全体，社会とし，社会的なるものを個別に還元するということであった。Ⅱでは，Ⅰに対する批判から個別なるものは全体，社会の拘束，規制を受けているとⅠの問題解決に一歩進むのであるが，全体的なるものを把握するため歴史を遡り，個別的なるものと全体的なるものの結びつきを明らかにすることができなかった。換言すると，個別的なるものが化合して新たな属性をもつ全体が形成されるというのであるが，この化合の内容を明らかにすることができなかった。

Ⅲのタイプをとっているマルクスの方法は彼/彼女の社会解釈を対象である社会が生みだしている範式で分析することによって個別と全体の関係を明らかにした。マルクス体系にある「物神性」用語は彼/彼女が全体を構成的に解釈するとき，それは全体を隠蔽しているというとき使用される。

基本関係は彼／彼女の解釈（これは意識的である。）をその関係のうちに位置づけることができなければならない。なぜなら彼／彼女の解釈も基本関

29）マルクスの価格論には労働価値説は必要でないと柴田敬は述べている。労働価値説を守ろうとするマルクス経済学者が労働価値説を単なる分析用具として考えているなら(実際，多くのマルクス経済学者はそうであるが)私は柴田に賛成である。「2節．労働価値説と資本価値説」『資本主義世界経済論』（上)所収

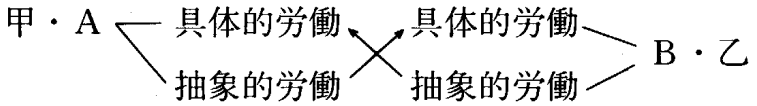
係の一構成要素であるから。

肝心なことは，マルクスの方法は三要素を叙述していくということの理解である。

さて，「商品」「貨幣」「資本」へと展開する上向の叙述体系の動力はそれらに意味を付与する実践（労働）の二面性である。

「貨幣」の中味については次のように説明される。

A商品を所持している甲とB商品を所持している乙の関係を図示する。



A商品とB商品の交換関係は，Aの価値がBの使用価値で，Bの価値がAの使用価値で表現されるということであり，これは甲と乙の関係をも表現している。

甲も乙もともに価値的に相手に働きかける。甲は乙の人間性，存在根拠を或るもの，例えばXで評価する。乙も甲を同様に或るものYで評価する。甲と乙の間に交流が成立しているということは，$X = Y$（価値）でなければならない。

甲は乙の使用価値実践を価値化する。乙も同様に甲の使用価値実践を価値化する。

したがって，甲も乙もともに量化される。

人間の本源的性質は社会的に形成された価値によって潜在化されてしまう。

このような交流の中味を表現するものが，貨幣である。貨幣は価値そのものである。貨幣に触れるものは価値となり，貨幣が触れるものも価値となる。図示しているような甲と乙の価値関係を本源的関係と解釈するとき，マルクスはそれを物神性と呼んでいる。

（甲・具体的労働⇄具体的労働・乙：本源的関係）彼／彼女は商品交換を本源的関係と解釈する。つまり，$W_a — G — W_b$はaという使用価値をもっている「モノ」とbとのいう使用価値をもっている「モノ」との交換

である。したがって，貨幣はその物々交換の不便を取り除くために考案されたものと解釈する。出来上った商品交換，流通を所与とするとき，彼/彼女のこのような解釈が一般的である。「商品」「貨幣」「資本」という能記に実践（労働）の二面性から意味を付与するとき，私はこれを「カテゴリー」の発生という。三位一体の世界を出来上った「構造」とするならば，「カテゴリー」の発生は，「構造の形成」でもある。

「出来上った構造」を理解するためには「構造の形成」の理解が不可欠なのである。

価格次元の世界では，人々は構造の結果だけを認知するにすぎない。マルクスが価値論で明らかにしようとしていることは価格次元の世界で人々が表現するために受容しているカテゴリーの意味をその発生においてとらえることである。価値で説明されているのは構造の形成である。価格次元で人々がカテゴリーの意味を理解する方法は表現体系の外側の「モノ」を直接に指示する仕方である。

この方法から帰結することは表現されているものの永遠性である。

カテゴリーの意味は表現体系のなかに求めなければならない。しかし最終的に意味を付与するのは実践の二重性であるが。

（2）

実践（労働）の二面性，「労働過程と価値増殖過程」

労働の二面性が具体的労働と抽象的労働であるように資本主義的生産過程の二面性が，労働過程と価値増殖過程である。

私はこれまでに主体に重きを置くとき，つまり基本関係の形成に関するときは，抽象的労働を価値実践，具体的労働を使用価値実践と呼んできた。

価値実践と使用価値実践は主体のなかで拮抗関係にある。ある人が価値実践し，別の人が使用価値実践をしているというのではない。個々の人間が価値実践と使用価値実践を内部に拮抗させている。商品交換は絶えず価値実践によって対象を同化することである。

対象の価値化，量化は「資本の文明化作用」の原型であり，私はこれを

「基本関係」であるとしている。

価値実践は商品交換とともに形成されているのに対して使用価値実践は人間にとって本源的である。使用価値実践は今西錦司が，いうところの「類推」で説明できる。

「類推とはその本質において，われわれの認識，すなわちわれわれがものの類縁関係を認識したことに対する，われわれの主体的反応の現われに他ならないと思う。……それはすでにこの世界に対するわれわれの表現であり，この世界に対するわれわれの働きかけでなければならない。」[30)]

今西の「類推」は類縁関係の認識，つまり生態系的認識とでもいいうるものからなる。

「この世界のいろいろなものの間の関係が一応類縁ということによって整理されるのである。類縁とはいわば血のつながりであり，土のつながりである。類縁とはものの生成をめぐる歴史的な親疎ないしは遠近関係を意味する。」そして類縁関係の認識は「われわれに備わっているところの一種の本能でさえある」といっている。[31)]

自然環境はそれ自体が一定の秩序をもって生成している。自然を構成している種々の「モノ」(生物，無生物を含めて）はその属性の類縁の近接度に従って結びついている。自然は「モノ」のこのような結合体である。

使用価値実践は類縁関係に従った実践であると規定しておく。したがって，この実践は感覚的，具体的であり，「モノ」の属性に適応する実践である。実践領域が可視的可触的空間を越えるとき，それは生態系からの類推に従う。

「モノ」が多様であるように主体もまた多様な関係を内包するが，「人間尺度」とでも呼びうるようなもので統一されている。[32)]

価値実践の場合，主体と対象の関係は一元的である。対象の価値化は主体が価値化しているということである。価値実践は商品交換の拡大とともにあ

30)『生物の世界』　19頁　今西錦司
31) 同上㉚　22頁

る。商品交換の自立性は労働力の商品化によって確立する。

商品交換は彼/彼女には $W_a \rightleftarrows W_b$ で G は単なる媒介手段であるが，実践の二面性からみるならば，つまり，全体的，社会的にみるならば，$W_a — G — W_b$ は $G — W — G$ であった。それは使用価値ではなく，価値中心の，G 中心の社会を示している。しかし，$G \rightleftarrows G$ は全く無意味である。$G — W — G$ は $G — W — \acute{G}$ として，量には制限がないから絶えざる増殖への運動体としてはじめて意味をもってくる。実践の二面性として主体が拮抗しているように，資本主義経済社会も労働過程と価値増殖過程の拮抗として存在している。

労働過程は価値増殖過程であり，価値増殖過程は労働過程なのである。

労働力の商品化によって，そしてその特性，つまり価値以上の価値を産みだすという特性によって労働過程は価値増殖過程となった。かくて資本主義経済社会は全体的商品交換，流通が関与していた二つの事柄，(A)と(B)を内に備えて構造化した。それは，以下のように表示される。

$$— W' — G' \cdot G — W \left\langle \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix} \right. \cdots P \cdots W' — G' \cdot G — W \left\langle \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix} \right. \cdots P —$$

つまり，素材変態は価値循環として遂行され，基本関係は素材の価値化のなかに込められている。既述したように「商品」は単に「モノ」によって規定されていないように，「資本」もまた「モノ」によっては規定されない。価値循環軌道にある「モノ」は「資本」であるが価値循環を外れると同じモノであってもそれは資本ではない。「モノ」ではなく価値循環によって「資

32)「人間が天然の素質である感覚器を用いて事物の存在や様態を知覚し，それを肉体それ自信で評価する，つまり自分より大きいか小さいかを自己の等身大を投じて対象と具体的に関係する。縮尺化しない互いの現寸法をもって対象と一対一の明らかな対応関係を持つということが人間の認識活動の基底的なる傾向，この認識によってとらえられた現寸的現実世界，肉体的知覚内の世界こそが人間のあらゆる実体験を構成してゆく。／形態的世界，可触的可視的世界の連鎖の道筋において触れられたものこそ実体であり，それが人間に真実の意味を伝えてゆくのである。」(75頁『人間尺度論』・戸田幸市)

本」は意味を付与されている。

本稿はブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判はブルジョア経済の運動法則の解明とどのように関連しているのか，を念頭にして諸カテゴリーの批判は何が問題であったのか，をみてきた。

諸カテゴリーの批判は「社会」を総体において把握するということに関連していた。

それは次のような諸点からなっていた。

(1)，実践（労働）はその表現諸単位をもっている。そしてそれらを解読する範式は価値実践に対応しているのが価値範式であり，使用価値実践に対応しているのが使用価値範式である。[33)]

---

33)「科学的思考には二つの様式が区別される。それらは人間精神の発達段階の違いに対応するものではなくて，科学的認識が自然を攻略する際の作戦上のレベルの違いに応ずるもので，一方はおおよそのところ知覚および想像力のレベルにねらいをつけ，他方はそれをはずしているのである。それはあたかも，新石器時代の科学であれ近代の科学であれ，あらゆる科学の対象である必然的関係に到達する径路が，感覚的直感に近い道とそれから離れた道と二つあるかのごとくである。」
『LA PENSÉ SAUVAGE』 par Claude Lévi - Strauss，『野生の思考』 20頁，大橋保夫訳。

実践がもっている表現諸単位を使用価値範式で社会解釈するか，それとも価値範式でそれをするか。社会解釈の差異は両範式の差異に依る。両範式の差異は，引用しているレヴィストロースの「科学的思考」の二つの様式に類似しているところがある。

使用価値範式による表現諸単位の選択，配置は体験・実践とは切離することはできないが価値範式は自立し，それ自体が発展する。

「技師が概念を用いて作業を行うのに対して，器用人は記号を用いることになる。自然と文化の対立の軸上において，彼らの用いるこれら両集合〔概念の全体と記号の全体〕にはずれがあり，その差は感知できるほど大きい。記号と概念の対立点のうちの少なくとも一つは，概念が現実に対して全的に透明であろうとするのに対し，記号の方はこの現実の中に人間性がある厚味をもって入り込んでくることを容認し，さらにはそれを要求することさえあるという所にある。」（同上　26頁）

価値範式は科学的範式に脱皮する。カテゴリーの素材からの分離が可能である，換言すると，価値範式は記号論的産物つまり概念を使用するのに対し，使用価値範式は人間のリアリティなる存在，したがって実感を共示コードとしている記号を使用している。しかし，両範式は「人智の発展の二段階ないし，二相ではない。」（同上，28頁）

使用価値範式は価値範式の基礎なのである。

(2), 価値実践と使用価値実践を拮抗させている主体の実践（商品交換）から基本関係としての価値関係を導出した。(価値形態論としてマルクスは展開した。)　実践の二面性は表現諸単位に意味を付与する。

(3) 彼/彼女は基本関係から拘束されているが，このことを意識していない。逆に彼/彼女は商品交換（基本関係）を構成的に解釈する。

(4), 彼/彼女の社会解釈は価値範式か（例えば，リカード）使用価値範式か（例えば，プルードン，シスモンディ）　両範式の混在か（例えば，A・スミス）どれかに依拠している。

(5), (1)と(4)から私は彼/彼女が基本関係の拘束を受けていると解釈した。これは実践の二面性を意味付与の基礎とする叙述体系に彼/彼女の諸カテゴリーを位置づけることができるということから判断している。

(6), 使用価値範式は価値関係を基本とした社会では二様の役割を果たす。

① 価値化した対象を使用価値的に解釈して事態を隠蔽する。この場合，価値実践が前提されている。

② 価値化した対象を使用価値的に解釈して事態を人間の本源性から批判する。この場合，使用価値実践を前提としている。

(6)についてはもう少し説明をしておこう。

自然状態における自然人の結合から演繹した権利・義務の体系，人権観念は人間的範式（使用価値範式）による商品交換の翻訳である。

封建的有機的共同体が商品経済によって侵食されつつあるとき，この段階では，主体の拮抗という意味での実践の二面性は存在していない。商品交換を推進する価値実践は人間的範式によって擬人的範式と対抗関係にあった。

ホッブスの市民哲学もまだ神の構図のなかにあった。しかし，神の描く世界像からは脱却していた。彼はガリレイを援用して社会事象を無機的に解釈した。確立しつつある価値範式は神の使用価値範式（擬人的範式）と対立していた。

価値範式は労働力の商品化によって価値実践が自立したとき，対象の価値化，量化の実体が据えられたとき，それは科学的範式へと脱皮した。そして

かって内包していた規範的部分を切り捨てた。すなわち，価値実践による非人間化の事態が進行してくると価値範式は道徳的，倫理的批判に抗しきれず，逆に科学性を主張することで規範性を切り捨てた。

価値範式の科学性の主張はそれがあくまで対象の価値化，量化を前提にしてのことであるから，価値実践の擁護に帰結する。これが(6)の①に結びつくのである。

価値化，量化している対象は諸個人の主観，体験からは独立している。

対象を量化する，あるいは量的関係を設定するための用具は諸個人の主観からはなれてそれ自体の論理を有する。

価値範式が科学的範式を主張するゆえんである。シュムペーターが「経済科学」の歴史を分析用具の歴史と解釈したのは，まさにこの点である。

(6)の①と②の違いは①が価値実践を前提にし，②が使用価値実践を前提にしていることである。価値実践者と使用価値実践者はともに使用価値範式に依拠して自己の実践の正当化をする。

現実には商品交換の規範的構成であるところの人権観念にいかなる内容をこめるか，ということであり，この人権観念に込めた内容の相異は彼らの実践の相異と対応しているのである。そこで社会の再生産に関連して次のように問題をたてることもできる。使用価値範式による事態の解釈，人権観念はどこまで，どの程度価値実践を許容できるのか。

換言すると市民は，労働者は対象の価値化，量化の現実と使用価値的社会解釈との乖離をどのくらい容認できるのか，がまんできるのか，ということである。この問いは社会の再生産に関連してマルクスがほとんど考察していない主体の側面からの接近を可能にさせる。

価値循環としての素材変態から生じて来る問題，市場梗塞による混乱が失業者を増大させ，これが彼らに階級的自覚を高めさせ，価値実践の否定，すなわち革命に向かわせる。

マルクスの想定した恐慌である。ただ彼はこれから一歩進んだ考察はしていない。つまり，このような経済混乱を危機に転化させないため資本は価値

実践を前提にした使用価値範式による社会解釈を積極的に利用して労働者をして状況を運命的と思わせるかあるいは慰撫するのである。[34)]

この資本の働きかけに対する主体の対応をマルクスはほとんどとりあげていない。プルードンに対する批判は鋭いがプルードンのように実践的解答は示していない。

私はこの点についてマルクスのカテゴリー批判の論理から，ひきだされるであろうことを簡単に述べることにしよう。

マルクスは資本主義社会からの脱出の根本条件としてそれは「労働日の短縮」である[35)]とだけ述べている。労働日の短縮が対象の価値化の縮小，使用価値実践の増大になるならば，自由の国への起点となるかもしれない。

しかし，労働日の短縮が資本によって許容されているものであるならば対象の価値化の縮小に直結しているわけではない。

労働生産性の上昇に依る労働時間の短縮は消費の減少を生じさせることはない。

消費するものが使用価値ではなく，価値であるならば，価値消費への欲求は無限であるからこの場合の労働時間の短縮は労働生産性の上昇となっているはずである。これは対象の価値化，素材の価値への転換がより一層進行しているということである。労働時間の短縮は消費領域での価値実践の増大となっており，自由の国への起点と解釈することはできない。

消費領域での価値実践の分析はマルクスには欠落している。つまり労働者は「モノ」を消費しているのではなく「商品」を消費しているのだという視角は存在しない。

この分析は A（労働力）— G — W/生活領域/ A — G — W の繰り返しを価値循環に位置づけることを要求している。実際，マルクスは「商品」は単なる「モノ」ではないことを見破っているのであるから，この視角をさらに

34)『Work and Authority in Industry』by Reinhard Bendix,『産業における労働と権限』
（ラインハルト・ベンディクス，大東・鈴木訳）
35)『資本論』Ⅲの2　1025頁

拡大して私達が身につけているもの(衣類)，口にするもの(食料品等々)，すなわち消費しているもの全てを価格表は落とされているが，商品として考察してみることが主体の側面から社会の再生産をみるためには要求されている。この問題提起は次の事柄とも関連する。価値循環システムに依る対象の価値化の拡大はいずれも生態系の崩すことのできない枠と，すなわち人間の生存にとって譲ることのできない枠と衝突するのではないか。そうなると社会の価値実践は使用価値実践に代らねばならない。資本主義経済の驚くべき拡大は対象の価値化，量化という全てを一元化する単純なる原理に依っている。

この原理は資本のものであるとともに使用価値ではなく価値を消費している私達のものにもなっている。社会の再生産に消費領域が深くかかわってきている。すでに推論されているだろうが私は価値実践を—マルクスの場合，抽象的労働は生産過程に限定されているが—「モノ」を使用価値としてではなく価値として消費するときにも適用している。したがって「モノ」を使用価値として消費するときは使用価値実践として考察している。

価値実践，使用価値実践は生産過程だけでなく消費過程をも含んだ実践，そしてそれは主体の拮抗である。対象の価値化を推進する価値実践と生態系的認識を深める使用価値実践の拮抗は消費過程でも存在する。

資本に雇用された労働は価値以上の価値を産み出す労働である。この労働は価値実践であるが，労働力を再生産する場である生活領域が価値循環を支える重要な環節となっているから生活財の消費もまた価値実践として考察されるだろう。資本は労働力を購入するのであるからその使用価値を発揮させる循環過程では労働を管理することができるが，労働力の再生産の場は循環過程を外れているのであるから管理することはできない。そこで資本は彼らが自らの意志で資本の管理下に入るように操作する。人々は使用価値実践において「リアリティをもって存在し，みずからを実体的に自己感をもって保持」することができる。しかし人々は価値循環過程においては使用価値実践を労働力を販売したと同時に放棄することを納得している。

したがって労働力の再生産の場では彼らはその本源的使用価値実践を追求

する。

資本は価値循環の円滑なる運行のため彼らの消費活動において彼らの使用価値実践を満足させてやらねばならない。使用価値実践を消費活動のうちに取り込んだことは「モノ」ではなく価値を消費させることを可能にできるから資本にとって成功なのである。

マルクスは奴隷制に基づく生産を高価ならしめる事情の一つについて奴隷が自己の人間的存在を他の道具を虐待し，荒廃させることで確認していると述べているが[36]，これは奴隷の悲しい使用価値実践なのである。

消費の場で，資本が直面している問題は，消費者の追求する個性をいかにして価値のコードへ転換するかである。

価値循環システムからの要求は「モノ」を価値として消費させることである。価値としての消費は消費への欲求が決して充足されることはないということである。価値の消費は未消化を本性とする，このことを価値循環システムは要求する。他方，人々には使用価値実践への欲求を充足させてやることである。個々の消費者の個性に応じた生産は資本による大量生産・販売とは適合しない。

資本が提出し，主体が受け入れた解答は使用価値実践を欲求しての絶えざる価値実践である。

換言すると，「商品」を購入してそれを「モノ」として消費しているのではなく，商品を「モノ」だと思って購入し，手にしたとき，それが価値（商品）であることに人々は気づくのである，あるいは気づかされるのである。

価値は個性的ではなく抽象的であって具体的ではない。価値を具体物として感ずるのは量としてだけである。価値関係のなかで彼/彼女がリアリティーを感得するのは他人との量的差異だけである。価値の消費は量的差異の顕示である。マルクスは価値の生産を字義通り労働者の精神的，肉体的摩滅としてとらえた。それは「３篇，絶対剰価値の生産」の「８章，労働日」と「４篇，相対的剰価値の生産」の「13章，機械装置と大工業」において鮮

36）同上　Ⅰ，255頁

かに，詳細に描かれているように具体的，歴史的事実であった。マルクスがとらえた価値循環にとっての問題は労働者の消費力の不足，つまり有効需要の不足から結果する販路の梗塞であった。

マルクスが販路の梗塞から直接に使用価値実践を展望したのは，つまり危機 (Krise)[37]に結びつけたのは「8章」「13章」を踏まえてのことである。

マルクスの時代とは（8章，13章）異なる状況下の社会再生産論は彼のカテゴリー批判の論理上に「消費の価値論」の構想を必要としている。

※　本稿での『資本論』解釈は山口経済学雑誌の以下の拙稿に立脚している。
「価値形態論の形成」(22巻5・6号)
「価値形態論の構造」(23巻1・2号)
「商品に表わされた労働の二重性」(27巻1・2号)
「労働過程と価値増殖過程」(27巻5・6号)
「資本の諸変態とその循環」(31巻1・2号)
「資本概念と労働の二重性」(31巻3・4号)

---

37) 価値実践の使用価値実践への転換が資本にとっての危機である。転換への契機は価値循環システムの齟齬，つまり恐慌であるが，恐慌それ自体が危機なのではない。
J・ハバーマスの体制統合と社会統合の二面からの再生産分析は，(1) 物質代謝と(2)，基本関係の二面からの再生産分析と似ているがマルクスの場合，(1)と(2)の結節を商品交換とし，商品交換・分析から統一されるが，ハバーマスの場合，二面の結合関係は錯雑としている。『晩期資本主義における正当化の問題』J・ハバーマス，細谷貞雄訳.